室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

音聲英語における強勢の研究

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大學
	公開日: 2014-05-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 増田, 貢
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2986

音聲英語における强勢の研究

増田　貢

A Study of Stress in Spoken English

Mitsugu Masuda

Summary

It is hardly necessary to say that stress, or what is commonly called accent, is one of the most important things to be studied especially by Japanese scholars of English. Stress in spoken English is not always fixed and unchangeable, as is shown in dictionaries. It varies according to various circumstances. The present treatise deals with this fact accessible to the writer in sentences as well as in words, not merely practically but theoretically likewise.

Order of Discussion

I. Introduction .....
II. Word-stress .....
1. Stress in Simple Words .....
2. Stress in Compound-words .....
III. Sentence-stress .....
1. Emphatic Stress .....
2. Even Stress .....
3. Contrasting Stress .....
4. Rhythmical Stress .....
IV. Concluding Remarks .....

I. 序　　說

强勢 (stress) とはいわゆるアクセント (accent) のことで，ある音または音節が發音される氣息の力をいうのである。英語においてはこの兩語から成る複合詞 stress-accent (强さアクセント) ともいつて日本語における pitch-accent (高さアクセント)，たとえば káta (肩) と katá (型)，tábi (足袋) と tabí (旅)，káma (鎌) と kamá (釜)，hána (初) と haná (花)，háshi (箸) と hashí (橋) 等と區別することがある。

英語においては强勢は語强勢 (word-stress) と文强勢 (sentence-stress) に分たれる。嚴密にいえば，語强勢は語中のいずれかの音節にあるのだから音節强勢 (syllable-stress こ)，れに對して文强勢は文中のいずれかの語におかれるので語强勢 (word-stress) というのが正當のように思われる。さて强勢の度合を考えてみると，SWEET は四段階に分けている，すなわち弱勢

(weak), 中勢 (medium), 强勢 (strong) および最强勢 (emphatic) である。 LLOYD はさらに精密に五段階に分けて第一强勢 (full stress), 第二强勢 (secondary stress), 半强勢 (half stress), 弱强勢 (weak stress), 無强勢 (stresslessness) としている。例語をあげていないが, 私の考えではたとえば, op-por-tu-ni-ty (數字の順序に從つて强勢が弱まる) のように 1 が第一强勢, 2 が第二强勢, 3 が半强勢, 4 が弱强勢, 5 が無强勢というわけになるのであろう。

つぎに文强勢について考えると, これは語强勢と違つて一定していない。つまり語の强意によつて相違してくる, たとえば:

Did he come to-day? (あの人は實際來たんですか。來たことはほとんど信じられない。)
Did he come to-day? (今日來たんですか。)
Did he come to-day? (今日來たんですか。)

II. 語　强　勢

1. 單語の强勢

單語における語强勢の位置は一定しておらない。ある程度の規則化はできるが, 例外が相當多いために實用的ではない。この方面の研究としては海外に見るべきものなく, わが國では故齋藤秀三郎氏のものが最も周到なものであろう。概則として考えられることはドイツ語と同樣に第一音節に强勢がおかれることが普通であつて, これはフランス語系の語も第一音節に戻つて强勢がおかれることである。たとえばフランス語の cité (× ′) から由來の city が (′ ×) となり, その他 prison, nature 等もその例である。つぎに接頭辭にはたとえば begin, assent, defence, receive 等の如く强勢がない。もつともこれには例外があることはもちろんでたとえば promise, preface, company, difference 等によつて知られる。接尾辭も强勢はおかれないが, ある若干の接尾辭によつて語根の强勢が變つてくる場合がある。一例をあげれば, -able で終る語は語根の强勢と同樣である: adorable, unforgettable, acceptable, commendable 等。ところが -able で終る語でも二樣に强勢がおかれる語がいくつかある: dísputable と dispútable, tránsferable と transférable, ínferable と inférable 等。これらは下線の强勢の方がむしろ普通のようである。この場合, 語根, つまり元の動詞の强勢とは違うところに强勢がおかれる語がある: ádmirable, cómparable, lámentable, préferable, réputable 等。そのほか接頭辭がきわめて明瞭な意義をもつ場合, 均等强勢 (even stress) となることがしばしばある: ánti-clímax, dísloyal, éx-président, ré-arránge, últra-fáshionable 等。同じ接頭辭でも否定を表わす接頭辭の場合はどうなるか。 in-, un- を有する語は一般に接頭辭に中勢 (medium) がおかれる: inaccurate, incorrect, inordinate; unknown, unfortunate, unusual 等。この中勢が時によると强過ぎて均等强勢となることがある, とくに對照を表わす場合にそうである: íllégal, ínsuffícient

等。なお in- をもつ少數の語において元の語の發音から分離して意義的に關係を失い，その結果强勢が in- という接頭辭におかれる場合がある：ímpious (pious), ínfamous (famous), ínfinite (finite) 等。

2. 複合詞の强勢

複合詞の强勢を支配する一般原則はつぎの三とおりである：

(′ ′)　　(′ ×)　　(× ′)

(1) (′ ′)

(a) 複合詞を構成する兩語が非常にはつきり區別されているとき。この場合ハイフンなしにならべて書かれる語が多い：

Hýde Párk, wéek énd, úpstáirs, dównstáirs, séasíde, áfternóon, píng-póng, plúm púdding, frónt-dóor, tíck-táck, súmmer mórning, cómmon sénse, stéel pén, gárden wáll, évening stár, mán cóok, héadwáiter, Wáterlóo, póst óffice 等。

(b) 形容詞（または副詞）＋形容詞の如き複合詞において：

góod lóoking, hárd bóiled, twénty-fíve 等。

(c) 分離できない複合詞，その他分離できない要素が著しく强い意義をもつとき：

úndó, mísjúdge, héadmáster, thírtéen 等。

(2) (′ ×)

(a) 自然物の名はこの强＋弱の形式をとる。それはこの構成する兩語が一緒になつて，ある單一の觀念を表示するからである：

áppletrĕe, bútterflў, góldfĭsh, sándstŏne 等。したがつて bláck bírd (黑い鳥) と bláckbĭrd (つぐみ) との區別ができてくる。street との複合詞は (′ ×) となる：Óxford Strĕet, hígh strĕet. ところが road または square との複合はそれに似て非で均等强勢 (′ ′) をとる：Óxford Róad, Hánover Squáre, párk láne.

(b) 複合詞が何かの種類の因果關係，行爲，または現象を表わすとき：

bóokbĭnder, éarthquăke, flówerpŏt, músicmăster, ráinbŏw, schóolmăster, stéambŏat, wálking-excŭrsion 等。

(c) 均等强勢の複合詞もしくは多音節語が名詞の前に形容詞的に用いられるとき：

a góod-nătured féllow (ただし He is gŏod-nátured.), hárd-bŏiled éggs, thírtĕen mén, Bérlĭn wóol 等。したがつて a seven o'clock dinner の seven o'clock は (′ ×) で，We dine at seven o'clock. のそれは (× ′) となる。

(3) (× ′)

(a) of および and でつなぐ名詞の複合において起る：

bǐll of fáre, mǎn of the wórld, cǔp and sáucer, knǐfe and fórk 等。

(b) 敬稱と姓名との複合において用いられる：

Mǐster Smíth, Mǐss Róbertson, Fǎrmer Húghes 等。

(c) gǒod mórning のような一種の感嘆詞の場合にも起る。

大體以上のように複合詞は gentleman, nobody, somebody, everybody 等の如く第一音節に強勢をもつものが多い。第二音節に強勢をとるものは already, uphold 等でその他 -self および -ever を含む複合詞がそれである。なお注目すべきことは複合詞を構成する兩語が文法形態および意義が明瞭になればなるほど中勢をとる傾向が強いということである：gentleman に對して ragman [rǽgmæn], Johnson [dʒónsn] に對して grandson [gréndsʌn] 等。

さらに特記すべきことは out-, over- という接頭辭をもつ語である。名詞または形容詞として用いられるときは第一音節に強勢がある：óutbrěak, ́utcǎst, ́utlǎnder, ́utlǒok, ́utpǎtient, ́utlǎy ; óvercǒast, ́verflǒw, óvershǒe, óversǐght 等。これに反してこれらの接頭辭をもつ動詞は第二音節に強勢がある：ǒutbíd, ǒutgrów, ǒutnúmber, ǒutrún ; ǒverláy, ǒverlóok, ǒverrúle 等。ところが over- をもつ名詞・形容詞および動詞はその over- の意義が「過度・過大」を表わす場合には均等強勢をとる：óver-áctive, óver-cǒnfidence, óver-óften 等。動詞はこの場合 over- に強い中勢をとる：òvercúltivate, òverdréss, òveréducate 等。

III. 文 強 勢

1. 強 意 強 勢

文強勢の一般原則は意義的に重要な語に強勢をおくことである。すなわち意味を表現するのに最も缺くべからざる語に強勢をおくのである。たとえば I got wet. という文において第一語は前後の關係からわかる語であり，第二語は單なる連結語である。したがつて強勢は最後の語である wet におかれる。これは消極的強勢であるが，これに對して Look how wet I am. においては very wet という意味を與える wet に強い強勢がおかれる。これは積極的強勢である。大體において新觀念を表わす語はすべて多少こそあれ文強勢がおかれ，これに對してすでにわかつているか，またはもちろんとされ得るような語は強勢がないということになる。

2. 均 等 強 勢

均等強勢は二個の連語中の二音節が均等の強勢をもつことをいう。

(a) 形容詞＋名詞 もしくは 名詞＋名詞 の二つの場合：

He is a góod mán, I have a góld ríng, This is my fáther's bóok.

またまれに 名詞＋形容詞： poet laureate.

(b) 單語とくに複合詞中に均等强勢が用いられるのが近代英語の特質である：
hígh̀róad, públic-hóuse 等。

(c) ある接頭辭はその語根とともに均等强勢をとる：
ántirádical, árchbíshop, míscónduct, únbelíef 等。

(d) 一音節以上の單語中にも起る：
ámén, brávó, fóurtéen, húllǒ, húrráh, thírtéen 等。

3. 對 照 强 勢

對照强勢は英語には非常に多い。すなわち對照を示すために意義的に對（つい）になる語に强勢をおくのである：

the tównmouse and the cóuntrymouse.

He said that cóuntry people were really much lazier than tówn people.

Quite ínside and óutside the house.

thírteen, fóurteen, fífteen (單獨の場合は How old are you? に對して thírtéen. となる)

しかし時には對照されているにもかかわらず，均等强勢をとることもある：

I don't mind cóld béef, but I cannot stand cóld mútton.

4. 律 動 强 勢

律動强勢とはたとえば a góod thíng であるが，a véry gŏod thíng となるような，つまり三つの連續的强勢を避けるために用いられるものである。したがつて均等强勢をもつ語は强勢語の前にくると（′×）となる，要するに不均等となる。一例をあげると Bérlín であるがその後に wool がくると Bérlǐn wóol となる。均等强勢語が氣息群 (breath-group) の終りにある場合，語尾の强勢がしばしば語頭のそれよりも强いことが認められる。この事實は音聲英語におけるつぎの實例がよく證明するところである：

(a) His age is fŏurtéen. Fóurtĕen mén.

(b) They were ŏutsíde. An óutsĭde pássenger.

(c) Some fell by the wăysíde. A wáysĭde ínn.

(d) She is a prĭncéss. The Príncĕss Álice.

(e) I saw him in the ăfternóon. Áfternŏon cálls.

(f) Among the Chĭnése. A Chínĕse lántern.

(g) He is going to Bĕrlín. Bérlĭn pápers.

(h) He is very shŏrt-sígh̀ted. A shórt-sĭghted mán.

(i) Made of ĭndia-rúbber. An índia-rŭbber báll.

IV. 結 語

英語は古來外國語の影響を多分に受け，いわゆる混成語 (composite language) であるために一定の語强勢の法則というものを定めることはできないが，語源を同じくするドイツ語と同様に第一音節におかれて發音される傾向のあることは爭えぬ事實である。また英米において語强勢が相違する語もかなり多い。

以上述べた强勢の諸變化は無意識に音聲英語において行われている。これをみても規則あつての言語ではないことがわかるのである。要するに語强勢においても文强勢においても心理的に導かれ，意義的重要性を直感して强勢の置き換えを行うことはその本質においてはどこの國語においても共通的現象である。したがつてこの種の文献は英米本國においてはまことに乏しく，むしろヨーロッパ大陸の學者によつて比較的研究されているのが現狀である。HENRY SWEET が一國語の研究は理論的にせよ，實用的にせよ，音聲學にその基礎をおかねばならないという言葉を想起して，文字英語 (Written English) より音聲英語へ國狀の變轉と共に注意を向けつつあるわが英語學界において，筆者はここに Stress の現象を科學的に分類して理論づけようとあえて試みたものである。

執筆に當つて鷲山教授の御助言に對して深く感謝の意を表する。

(昭和 25 年 10 月 31 日受付)